

讃美と私たち：

主よ、わたしの唇を開いてください。

そうすればこの口はあなたの讃美を歌います



2011年2月 正木牧人

讚美と私たち♪

序：キリスト教会は歌う教会.....	3
音楽でつづられる礼拝.....	3
讚美は人を育てる.....	3
教会音楽に真剣に取り組んできた歴史.....	3
I.人は歌う。神の被造物として.....	5
II.罪の結果、歌とは何かがわからなくなった.....	7
罪の結果、歌はどうなったか.....	7
異教も歌を用いる.....	8
III.救い主を待ち望む歌、救い主をたたえる歌.....	11
旧約聖書・新約聖書・そして御国.....	11
三位一体論的讚美観.....	13
IV. 神の贈り物：キリスト教会の讚美.....	15
讚美改革：歌う教会.....	15
礼拝と讚美.....	15
御言葉を強める讚美.....	17
教える讚美、御言葉を生活にゆきとどかせる讚美.....	20
教会は十字架を歌う.....	22
V.礼拝の讚美のあり方.....	24
終わりに.....	26

序:キリスト教会は歌う教会

音楽でつづられる礼拝

キリスト教会の礼拝は音楽でつづられる。はじめの「父と、子と、聖霊の御名によって、アーメン」から「父と子と聖霊の神の恵みが豊かにありますように」という祝祷まで、歌でつづられる。三位一体的な礼拝、讚美であふれた礼拝である。

讚美は人を育てる

教会には、讚美は人を育て、礼拝者を育てる、という信念がある。それは歴史的にはカントールという、教会音楽家の制度があったことなどにもあらわれている。牧師と同じく神学の学びをし、そして音楽をきわめたスタッフが教会に仕えている。バッハもそのような立場だった。カントールは牧師と共に礼拝をつくる働きをした。礼拝の讚美を励ます聖歌隊の訓練をした。奏楽楽団を編成し、楽譜を書いたり緻密な練習を重ねたりした。

教理問答は音楽で教えられた。会衆は神の言葉を歌い、正しい教えを歌って繰り返し讚美した。

教会音楽に真剣に取り組んできた歴史

例えばルーテル教会はバッハ、シュッツ、マイケル・プレトリアスやポール・ゲルハルトなど、讚美歌作者、奏者、編纂者など、真剣にライフワークとして教会音楽に取り組んだ教会人が多い教会である。

讚美と私たち♪

私たちは信じていることを歌い、歌っていることを信じるようになる。Lex orandi, lex credendi。歌う内容に心を配る。讚美は感傷的なものではなくむしろ教理を内容とする。讚美をしつつ、私たちは神様のなさったことを味わい、歌いつつ歌によって自分が牧会される。

Ein feste Burg ist unser Gott, ein gute Werk und Mauer
 Arbeit, die uns schützt und abwehrt, die uns die Heiligkeit
 Und was die Werke und Tugenden, und was die gute Verfassung
 Gegeben, von uns selbst, so ist uns die Gabe von
 Gott als feste Funde mit Recht, es ist nicht menschlich
 Die Kunst, die wir nicht von uns selbst, sondern von
 Und was ist sein geistlich Werk, es ist nicht menschlich
 Und was ist sein geistlich Werk, es ist nicht menschlich

“Ein feste Burg.”

I.人は歌う。神の被造物として

なぜ私たちはそのような教会なのだろうか。まず人類の歴史から見てみよう。人は歌う。音楽は常に人の歴史と共にあった。人の歴史は音楽の歴史である。

世界のどこでもいつの時代も、人々は祭りで歌い、田畑で歌い、家庭で歌ってきた。歌は不思議である。私たちは喜びも悲しみも、出会いも別れも、愛情も憎しみも、歌にのせて味わう。人は歌うことで仲良くなり、仲間であることを確認し、元気になる。人生が豊かになる。また人は歌うことで人生の意味を味わい、悲しみを堪え忍び、癒される。歌と同時に私たちは楽器を奏で、踊りを舞う。自分で演奏して楽しむだけでなく、美しい音楽を聴いて心が満たされる。

それもすべて私たちはそのように造られているからである。私たちは神様のかたちに造られた。私たちの神様は音楽的な神様である。神様は音楽であり、神様が働くとき音楽的に働かれる。

神様がこの世界を造られたとき、リズムをもって造られた。夕となり、朝となった、というリズムがそこにあった。リズムを造られた。また、リズムだけでなくそこに言葉があった。「光よ、あれ！」という、御言葉によって世は造られた。神様はリズムと言葉でメロディーをかなで、人間の創造を持って世界を完成された。人の使命は「産めよ、増えよ、地に満てよ」と「地を従えよ」であった。

神様のかたちにかたどって作品として造られた人間が、リズムと言葉を全身におびているのは当然のことである。最初の人

讚美と私たち♪

アダムは、誰に教えられることも強制されることもなく、神の作品である妻エバを見たとき歌って喜んだ。人が歌った最初の歌は、神様がお与え下さった妻を感謝する歌であった。創 2:23 「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イチャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」 詩的に見てもことばあそびをしながら、歌っている。

神様は歌う。それで人は歌う。歌うとき人間であることの豊かさを味わい、生きている実感を得る。



II. 罪の結果、歌とは何かがわからなくなった

罪の結果、歌はどうなったか

ところが、罪が人類にはいつてきたため、神様との生ける関係が絶たれた。人は何を歌うか、なぜ歌うのか、音楽とは何か、という大切なことが見えなくなった。まだ歌う存在ではある。しかしその本来の意味がわからないまま、歌の与える効果を享受している状態である。

アダムは神様から、創 2:17「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」といわれていたのに、蛇はアダムとイブに「神様は本当にそのようなことを言われたのですか」と混乱させて神様の歌を疑わせた。彼らは蛇に、創 3:4-5「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」と言われて、ついに神様を疑い、神様から離れ、自分が神様のようになる方を選んだ。これで神様との関係は絶たれ、裁きの対象となった。

神様との生ける関係が絶たれた、すなわち、歌の源から絶たれた。その結果、人は神様を避けるようになった。神様の足音というリズムが近づくと、二人は恐れて身を隠した。喜びの使命であったはずの地を耕すという働きがのろいにかわり、祝福そのものであった子を産むことが苦しみとなった。耕し収穫

讚美と私たち♪

するというリズムも、鼓動を聴きながら胎内で育つリズムも、神様から離れたことの厳粛な刑罰を受けることになった。夫と妻の関係も支配・被支配の関係に陥ることとなった。

神様から与えられていた「歌う」というたまものは、本来の役割を果たすことができなくなった。神様を歌い、神様のつくられたものを深く味わう歌を歌わなくなった。そして、神様との関係が絶たれたままで人々は自分自身の歌や、人の世の歌を歌うことになってしまった。音楽自体が目的となっていく。

なるほど墮落したあとも、歌の持つ一定の役割と意義があるだろう。本来神が人に与えた音楽の意義から離れたところで、人はしかし音楽から、広い意味で何らかの利益を得ながらその歴史を紡いできた。しかし歌には神様にある更にすばらしい本来の役割と意味があるのである。

異教も歌を用いる

歌には大きな影響力がある。そこで讚美は異教の偶像礼拝の中で盛んに用いられていた。異教のならわしの中では、人は歌い踊って、神を呼ぶ。異端は音楽を用いて教えを広める。また、人間から神様に讚美を捧げ、奉納する。

異教の特徴は、神様から離れた人が救い主イエス・キリストを通さずに神様に近づこうとすることである。讚美は讚美でなくなる。私たち人間が神様に讚美を捧げると、その努力を認めて神様が答えてくださり、神様が来てくださる、という考え方がある。その一方で、私たちが音楽によってこの浮き世を離れ、

讚美と私たち♪

天の神様の高みにあがっていく、という考え方がある。

その両方の考え方に共通するのは上昇志向である。イエス・キリストはむしろ私たちのところに降りてきてくださった。上昇の考え方は、この汚い世に私たち罪人のために人となって来てくださり、私たちのために十字架を負いきって死に、罪と死と悪魔の力を滅ぼし勝利を得てよみがえってくださった主イエス・キリストを待ち望みその勝利を祝う私たちの讚美とは全く違うものである。

私たちが犠牲をはらって讚美をするので、それを喜びその努力に答えて神様が来てくださる、または神様のもとにいくことができる、という考え方は宗教的、操作的な一種の恍惚状態を求めることであろう。音楽を通じて、人はいわゆる宗教的な感覚を得ることがある。神様が共にいることを感じ、靈的に高められ、讚美の靈に満たされる、という感覚である。しかし、恍惚状態になり、この世の苦しみを離れて、別世界に心が飛んでいき現実逃避型の宗教的なエクスタシーを感じることは本来の讚美とは区別されるべきであろう。

例えば1列王18章を見ると、人々は異教の神、バアルの名を朝から真昼まで呼び、「バアルよ、我々に答えてください」と祈っている。しかし、声もなく答える者もなかったので彼らは築いた祭壇の周りを跳び回り、呼び続けたが、何も起こらない。真昼ごろ、まことの神様に遣わされた預言者エリヤが「大声で呼ぶがいい。バアルは神なのだから。神は不満なのか、それとも人目を避けているのか、旅にでも出ているのか。恐らく眠っていて、起こしてもらわなければならないのだろう。」と言うの

讚美と私たち♪

を聞くと、彼らはさらに大声を張り上げ、彼らのならわしに従って剣や槍で体を傷つけ、血を流すまでに至った。真昼を過ぎても、彼らは狂ったように叫び続け、献げ物をささげる時刻になった。しかし、声もなく答える者もなく、何の兆候もなかった。

それとは対照的にエリヤは「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられること、またわたしがあなたの僕であって、これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。」と祈っている。御言葉によってことを為された神様をおぼえ、全く信頼している。讚美によって神を操作するのではなく、神様が為してくださった働きを覚え、神様が御言葉をもって為してくださることに期待する祈りの姿である。



III. 救い主を待ち望む歌、救い主をたたえる歌

旧約聖書・新約聖書・そして御国

人が罪に墮落した後、神様は救い主をお与えになる約束をすぐに与えてくださっている。人を誘惑し、だいなしにした悪魔に対して、女の子孫としての御子イエス・キリストが来て打ち勝ってください。創 3:15 「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く。」 その約束以来、やがて来てくださる救い主を待ち望む一握りの民は、自分中心と偶像礼拝のシンフォニーが繰り返し奏でられ広められる人の世の中で、まことの神様を待ち望み、救い主を待ち望む歌を歌ってきた。

旧約聖書全巻は、救い主を待ち望む民の歴史を通して、神様を離れた救われる正統な理由も価値もない罪人である人間に神様が救い主をお与えくださるというすばらしさを歌っている。神の民の歩みと讚美は切り離せない。イスラエルの軍勢は神の歌を歌ってエリコの城壁を打ち破り、ダビデ王は楽器を巧みに奏で、旧約聖書の礼拝は讚美で満ちていた。

新約聖書を見ると、イエス様ご自身の誕生から死までが讚美につつまれている。救い主の誕生に際し、真つ暗な寂しい野原で羊の群れを守る羊飼いにまばゆい天の軍勢があらわれて讚美した。その讚美は今まで礼拝の中で歌い継がれている。イエス様は父を讚美しつつ歩まれた。イエス様はイザヤ書 53 章など

讚美と私たち♪

の受難のしもべのうたで
預言されていたように十
字架に向かわれた。「ダビ
デの子にホサナ」と幼子
の口に讚美が用意され、
イエス様は彼らが黙れば
石が叫ぶ、と言われた。



私たちの罪を担ってくだ

さった主は不当な裁判のときには口を閉じられた。そして、詩
編22編の歌をもって十字架で死なれた。イエス様を宿し、イ
エス様の母となることになったマリヤの賛歌、マグニフィカト
も有名である。

初代教会はイエスを讚美する讚美で満ちていた。例えばピリ
ピ書2章に残されている当時の讚美歌を見ると、すべての者が
膝をかがめて父なる神と主イエス・キリストを讚美するとされ
ている。ピリピ2:10-11「こうして、天上のもの、地上のもの、
地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌
が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神
をたたえるのです。」

また、天国は讚美で包まれている。やがて私たちが迎えられ
る御国では讚美があふれている。私たちに今与えられている主
の日の礼拝は、地上におりた天国であり(Heaven on earth)、主
を讚美して永遠をすごす私たちにとって今讚美することは天国
の前味を味わっていることである。

三位一体論的讚美観

私たちの神様は、父と御子と聖霊の、ひとりのまことの神様である。私たちはその神様を讚美する。神様が私たちを造られた。御子イエスキリストが私たちのために十字架について死なれた。私たちは罪のなわめから開放され、聖霊による更新の洗いである洗礼によって神の子供とされた。

詩編 106 編の説教でルターは、罪の告白が讚美であると言った。神の前に罪人であることの告白、キリストを信じる信仰の告白は、そのような私を救ってくださる神への讚美を意味する。

神様のかたちに造られた人間のアイデンティティに歌は含まれている。罪の墮落によって音楽の内容と意義を失い、自己目的化していた人類は、キリストを待ち望み、キリストをお迎えするとき本来の音楽と出会う。

実は私たちが神様を讚美する前に、神様が私たちのことを歌っておられる。神様は私たちを愛して私たちのことを歌う。新改訳聖書ゼパ ニヤ 3:17 は、「あなたの神、主は、あなたのため中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。」とある。私たちが神様を讚美するのは、その神様が私たちの唇を開いてくださるからである。詩編 51:17 にあるように、「主よ、わたしの唇を開いてください／この口はあなたの讚美を歌います。」という讚美が私たちの讚美の心である。

人は救われて本来の意味で歌い始める。キリストにある者は、

讚美と私たち♪

音楽を人間に与えられた神様をその音楽を用いて讚美する。ここに三位一体論的な讚美の神学がある。クリスチャンたちの讚美の歌の題材は常にはっきりしている。救い主イエス・キリストの受肉と十字架と復活による罪への勝利と救いに対する感謝である。詩篇 118 編は復活の祝いのに歌われてきた。参考にされたい。118:1-4,15b,16-17,21-24。



Good news from heaven the angels bring,

Glad tidings to the earth they sing:

To us this day a child is given,

To crown us with the joy of heaven.

~Martin Luther

IV. 神の贈り物:キリスト教会の讚美

讚美改革:歌う教会

16世紀の宗教改革は、礼拝の民に讚美を取り戻した改革でもあった。コラールを歌い、詩篇を歌い、主の救いのみわざを讚美してきた。それまで、600年ごろから教会では牧師と訓練を受けた音楽家以外には礼拝で歌うことは許されていなかった。1524年、ルターは讚美歌を会衆の口に取り戻した。

1538年に Preface to Symphoniae iucundae の中でルターは「神の御言葉に次いで、私は音楽を最高にほめたたえる」と言った。¹ ルターは、聖書の真理を歌うことは信仰を教えるために非常に大きな力を持つと考えた。それで、ルーテル教会は讚美を通して信仰を告白するという意味で「歌う教会」として知られてきた。

礼拝と讚美²

神の民であるクリスチャンは、まず礼拝で歌う。御言葉と聖礼典のまわりに集められて神様のめぐみにあずかる定期的な集

¹ WA50:371, LW53:323

² David J. Susan, Some Parallel Emphases Between Luther's Theology and His Thought about Music, and Their Contemporary Significance Concordia Journal 1989 p10-

讚美と私たち♪

いこそが、クリスチャンが神様を讚美のもっとも中心的な場である。

礼拝では、神の贈り物であるみ言葉を聞き、聖餐にあずかる。自分のわざとして讚美し神様を動かす、というよりも、礼拝では神様ご自身、神様がなしてくださったこと、してくださっていること、してくださることを讚美する。これが讚美のいけにえと呼ばれるものである。出エジプト 15:2a。ヘブル 13:15。

礼拝で私たち人間が讚美する。人間が歌をつくり、歌う。しかし、讚美は人のなすことであると同時に神様の御言葉の宣言に際して神様を讚美するように神様が私たちに与えてくださった神様からの贈り物である。「わたしは音楽をもって心から神を讚美したい。音楽は神からのすばらしい贈り物であり、わたしもまたすべての人も神を、神のみを讚美するためにこのために与えられた贈り物を用いて讚美しようではないか。」とルターはいざなう。³

購われた者の心が喜びにあふれてつい歌ってしまう、それが礼拝であっても個人であっても讚美はそのように神様がお造りになり人に与えてくださった贈り物である。クリ



³ Preface to Georg Rhau's *Symphoniae incundae*, 1538, LW53:321-324

讚美と私たち♪

スチャンは信じていることを歌ったり告白したりしないで黙していることはできない。ルターは「旧い契約と対照的に、新しい契約では私たちにはよりよい礼拝が与えられている。詩篇 96:1 で「主にむかって新しい歌を歌え」といわれているが、私たちの心を神はそのひとり子であるイエス・キリストのあがないのみわざによって喜ばせてくださるのである。キリストは私たちを罪と死と悪魔の力から解き放ってくださったのであるから喜ばずにおれようか。この恵みにあずかるものには黙っていることはできない。歌いたくない、語りたくない、という人は、その態度によって信じていない、新しい喜びの契約にあずかっていないということを示しているのである」という。⁴

礼拝での讚美は、会衆全員に属する義務であり喜びの特権である。ルーテル教会での讚美は、神様を讚美すること、聖書が中心であること、教会暦のリズムに従うリタージュカルなものであることが特徴である。また、それが部分的には牧師、会衆、聖歌隊、奏楽者が歌い奏でていても、教会全体に属するものである。

御言葉を強める讚美

神の言葉とは、ルターにとってまず「語られる言葉」である。Viva vox evangelii という福音の生きた声、福音の説教、神様が人に語ってくださることが何よりも重要である。ロマ 10:17 にあるように「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリス

⁴ Preface to the Babst Hymnal 1545, LW53:333

讚美と私たち♪

トの言葉を聞くことによって始まるのです。」他の宗教改革者が、御言葉に比べれば音楽には何ら力がない、と考えたことと対照的に、ルターは「メロディーはことばにいのちをふきこむ」と言っている。⁵ 神様の御言葉の宣言を更に強めるため、ルターの讚美歌や礼拝音楽は用いられた。⁶ 今日のクリスチャンは多くの場合、讚美や音楽を聖霊の助けによって私たち人間が神様のめぐみに応答する作業と思ひこんでいる。ルターは音楽にその機能と同様に大切なもうひとつの機能をみている。聖霊が私たちの心への神の御言葉の宣言を強めるため音楽を用いられるという機能である。

ルターは1520年から1530年の間に27曲の讚美をつくった。生涯で知られている彼の讚美は36曲であるから大部分がその時期につくられたことになる。同じ頃書かれた *Formulae Missae*1523年と *Deutsche Messe*1526年で、ルターは礼拝の中で母国語での会衆讚美をおいた。教職者や聖歌隊だけでなく信徒が、自分の唇で神に祈り、讚美し、感謝をすること、語られた御言葉を再確認し、その意味を自分の唇で味わうこと、これが会衆讚美の具体的な導入(Preface to the Babst Hymnal 1545, LW53:333)の姿であった。ルターはドイツ語の詩人たちにドイツ語の讚美歌をつくるように励ました。⁷ ルターの意図は、ドイツの人々が詩編を、すなわち霊の歌を自分の唇で歌うことによって、自分の生活の中に御言葉が歌という手段によ

⁵ WA44:352、LW7:71

⁶ WATischreden 2:2545

⁷ WA12:218、LW53:36-37



て住み始めるようにという願いであった。⁸ ルターは領主たちに音楽家たちを助けてよい音楽をつくることができるように整えるように訴えている。

詩編 118:15 を講解してルターは公の讃美の重要性を解説する。「御救いを喜び歌う声が主に従う人の天幕に響く。主の右の手は御力を示す。」公の讃美は教会のしるしであり、キリストを唯一の救い主として告白する讃美が天幕で集まったすべての聖徒たちによって歌われるのである。人のわざをほめたたえるのではない。神様が用いて人々をめぐみ、助けなぐさめ勝利と救いを与える説教や公の信仰告白は、世界の前で神の栄光をあらわすことであるとした。⁹

Formula Missae 1523 に、それまで司祭がささやいていた

⁸ WABriefwechsel3:No698、LW54:129

⁹ WA31:141、LW53:221

讚美と私たち♪

聖餐の設定辞を歌うように、と言っている。¹⁰

私たちのすむ現代、音楽は聴いて楽しむものになりつつある。しかし、私たちが礼拝で讚美に参加すること、讚美する者であることを再認識しよう。これを通して聖霊は私たちを福音のもとに導いてくださるのである。

教える讚美、御言葉を生活にゆきとどかせる讚美

教会で「教え」とは、教理問答、詩篇、説教などを歌う、ということであった。初代教会の時代から異端の人々でさえ歌を用いて教えを教え広めていた。ルター派は讚美歌の教育的機能を強調してきた唯一の教会である。「教え」の強調は、教会の強さを象徴するものであった。教えの強調を教会の弱さと考えるようになったのは最近のことである。

ルター派の讚美歌のほとんどは、**グローブ**のように私たちの全ての生活と礼拝の営みを教えており、それらにぴったりと沿っている。その中心は、キリストにおいて神がなしてくださったこと、である。

それで、礼拝では常に神の栄光の讚美が大切な位置を占めてきた。また音楽が、人々のクリスチャン生活のすみずみにまで祈りや感謝を持ち運びゆきわたさせる大切な役割を担ってきた。家庭礼拝で歌い、教会の礼拝で歌い、老若男女、すべての人が参加し、そこで恵まれて生活がいきる。詩篇 5:11a。

¹⁰ LW53:28、WA12:212

讚美と私たち♪

教会で私たちの信仰告白は音楽に結びついている。教会では音楽はそれ自身が目的になることはできない。そ



それは偶像礼拝となる。すべての教会の音楽は礼拝の音楽であり、それが讚美であれ讚美演奏であれ、聖歌隊であれ独唱であれ、神様ご自身以上に自分たちに賞賛や関心を引くことになることはふさわしくない。

神様は、人間にだけ、動物には与えられていない歌というたまものを与えている。言葉と音楽が結びついている歌である。御言葉を歌うとき、そこには二重の力と祝福がある。音楽には悪に立ち向かい克服する力がある。また、御言葉を用いて働かれる聖霊に悪に立ち向かい克服する力がある。力があるから音楽の用い方に注意する。音楽にしかできない働きがある。私たちは与えられたたまものを磨いて神様と隣人に仕える。「神の御言葉に次いで、私は音楽を最も高くほめたたえる。人間の気持ちに仕えるしもべであり、また人の気持ちを支配する者でもある。悲しむ者を慰め、幸福な者を恐れさせ、絶望している者を励まし、高慢な者を謙遜にさせ、情熱的すぎる者をおちつかせ、憎しみに満ちた心をやわらげるために、あなたは音楽よりもよい道具をもっているだろうか。・・・結局のところ、神は人にだけ音楽のたまものをお与えになった。神を言葉と音楽によって

讚美と私たち♪

ほめたたえるべきことを教えるためである。」¹¹

熱狂主義の人々は音楽を憎んでいるのに、なぜ私は音楽を愛しているのか、とルターのことば。

- ① 音楽は人間に与えられた神様のたまもので、人間が作り出したものではない。
- ② 音楽は魂に喜びを与える。
- ③ 音楽は悪魔をけちらす。
- ④ 音楽は無邪気な喜びを与え、その結果怒りや欲望や高慢を消し去る。私は神学に次いで音楽を高く評価する。ダビデや予言者たちは自分の大切な事柄を詩や歌であらわした。
- ⑤ 音楽は平和な時を支配する。この芸術によって人々は平和を保たれる。バヴァリアの領主たちは音楽を振興するのでよい。ザクセンの領主からは兵器や爆弾以外の話を聞かない。¹²

教会も社会も、歌の影響力の強さをよくわきまえて、正しく常に用いるようにするべきである。

教会は十字架を歌う

私たちの信仰は十字架の神学である。十字架に私たちはもっとも純粋な神学を見る。「キリストの十字架のみが私たちに御言葉を教える。十字架はもっとも純粋な神学である。」¹³ 教会で

¹¹ WA50:370-372、LW53:323。類似した思想は以下においても見られる。WATischreden 1:968。WA54:33、LW15:273f。

¹² WA30,Part2,p696

¹³ WA5:217

讚美と私たち♪

歌われる歌は、キリストとその十字架が中心である。「主に歌うということは常にうれしく楽しいとは限らない。「新しい歌」とは十字架の歌という意味である。」¹⁴ 教会は十字架のもとにいつもとどまる。そうであるので教会は十字架の歌を歌う。十字架につけられて私たちのために死なれ、また、よみがえってくださったイエス・キリストを歌う。聖霊は御言葉を用いて働かれる。教会は、既に来てくださり、やがて再び来てくださる方であり、いつも共にいてくださる、私たちのためのキリストを歌う。ルターが1524年の讚美歌ウィッテンベルク版の序に書き残していることば。「私たちは私たちの救い主イエス・キリスト以外に歌うべきお方はいない。」¹⁵



¹⁴ WA2:333

¹⁵ WA35:474、LW53:316

V.礼拝の讚美のあり方

最後に、礼拝での讚美のあり方を考えてみよう。牧師や奏楽者の多くは、昨今の教会音楽の状況を心配している。歴史的な教会が歴史を貫いて実践してきた音楽から、かつてないほど離れてきている。讚美とは何かをわきまえないで、人々が聞きたい音楽を、教会でも奏でるという原則になってしまうと、どうなるだろうか。牧師は式典のディレクターとなり教会音楽家がエンターテナーとなる。ルーテル教会では、讚美歌は信仰の教師として、聖書と小教理問答の次に宝として重んじられてきた。しかし今日の状況では将来のルター派の礼拝、そして教理が危ぶまれる。

真理は、文章として表されているだけではなく、私たちの生活に適応されるもの。教会の讚美歌はいつも信仰告白的なものであった。「悪魔を通して世がわたしたちを滅ぼそうとしても、彼らは私たちに勝つことはできない。讚美歌は礼拝のなかで歌われるようにつくられてきた。だから私たちは讚美歌を聖なる、貴重なものとしてうやうやしく備えるべきであろう。信仰を表明し教える、という讚美歌のもつ奥深く美しい世界、これは、神のおくりものであり、また神の教会の宝である。」

このような信仰告白的な讚美歌観は歴史の中で何度も危機を乗り越えてきた。代表的な4つの混乱を述べておく。

主観的な歌詞の方が神様を身近に感じる点でふさわしい、と考える人々がいる。しかし讚美歌は、教会全体の公のものであり、公同性、客観性を必要とする。信仰のあり方、主観的な経験や身の上話的なことがらでなく、教会暦やその日のテーマや

讚美と私たち♪

聖書箇所にあうものが選ばれる。歌詞は単純な者だけでなく、内容をよく考えて理解しなければならない難解なものも必要である。讚美歌を歌うという経験そのものを楽しむのではなく、内容が迫ってくる讚美である。

現代社会には多くの新しい問題が山積であり、私たちは讚美歌の中でもこれらの課題を取り上げるべきである、と考える人々がいる。またこの時代に生き延びて成長していくためには、教会は少しは自分を曲げて世にあわせていかなければならないと考える人々がいる。しかし、私たちは世を愛し世のために死に世に来てくださる救い主、イエス・キリストの御言葉を歌う。

私は礼拝に興奮を求めている、燃やされて教会からでかけていきたい、讚美と説教で私の感情を高めて一週間のあゆみのために気持ちが盛り上がらせてほしい、と考える人々もいる。しかし人は感情面だけでなく、知性、気持ち、意志の全体が満足させられるとき、靈的に満足する。

私たちは信仰告白的な讚美の理解をしっかりとって礼拝音楽を備えていく必要がある。ルターは「ひとびとは自分の讚美することを信じる」と確信していた。人は信じていることを歌うものであり、また歌うことによって人は信仰内容を教育されていくのである。Lex orandi, lex credendi ということばがある。教会が教理として告白する事柄はまず教会の礼拝において明らかになる、という意味である。



終わりに

かつてカトリック教会は信徒から讚美を奪い、多くの宗教改革的教会は音楽を礼拝から閉め出してしまった。初代教会からの豊かな讚美の伝統から切り離された彼らが「新しい歌」というとき、また、リバイバルはいつも新しい歌を生み出す、というとき、音楽を会衆に取り戻すという考えを示している。ニューエイジ運動などへの対抗手段、青年層の獲得などを目的に、心の癒しや、ちまたの音楽スタイルを積極的にとりいれるところにも、讚美の伝統の貧しさを見る。内容が神讚美であればどんな形式でもよい、という単純なものでもない。また歌詞が私たちが教え、私たちを牧会する。キリスト教会は常に音楽の力を感謝し、注意深く、しかし大胆に用いてきた。その信仰告白を**手袋**のようにあらわす神の賜物が数限りなく与えられている事実に気づく。信仰や教えの内容をあらわす讚美として歌い上げる賜物として、知性的にも美的にも信じられないほど卓越した讚美歌が多く残されている。神様に罪の赦しと新しいいのちをいただいた私たちが、世におかれているところで自分をみがいて隣人によりよく仕えていく日常の力になる讚美の伝統を是非見直してみよう。

私たちは、神様によって造られ、救われ、生かされている。世の生活の現実美しいものばかりではない。私たちが罪人だからだ。しかし、焦点は私たちや私たちがしていることではなく、むしろ神様であり神様がなされたことにある。人は讚美するためにかされている。礼拝の讚美、生活の中の讚美が、世

讚美と私たち♪

にある私たちの信仰を教え、導く。讚美歌をその本来の姿である祈りの本として再認識しよう。また、キリスト教会に与えられた伝統の宝物を感謝をもって味わい、喜び、学び、生かしていこうではないか。△



讀美と私たち♪

フィードバックは masakimakito@gmail.com まで。

2KRbooklet